

漢字字體、書體相關的幾項問題—由政策定義的標準字形及其電算處理—

市川春樹

東吳大學日本語文學系兼任助理教授

摘 要

一般而言，在日語教育領域中，漢字字體是以當用漢字字體表上的漢字為基準。而這些漢字的簡化程度，通常位於臺灣與港澳地區的繁體字、韓國的正體字(康熙字典體)與中國的簡體字中間。

在本文中，筆者將進一步探討既有研究中所指出的，出現於當用漢字字體表上，和正體字有相同地位的略體字與在字體表外的非正式字體之間的衝突。並且，本文將系統化整理當用漢字字體表中存在的非正式略體字、在康熙字典體內規範的表外字，與使用略體字的手寫字體之間錯綜複雜的字體概念。又，本論文亦以 83JIS 為中心，特地書寫一章節，討論隨著漢字電算化，因應而生的漢字問題。

首先，本文會從台韓兩國簡體字與俗體字的現況談起，闡明該地區正體字與簡體字之間的界線。接著，筆者將與日本漢字政策施行後的簡化漢字做比較，論及日本是如何透過漢字政策，擇定略體字與俗體字，並且考察該政策如何對文字使用產生影響。最後，是在電腦上處理漢字制定字元編碼時，如何處理字體與書體的問題。前者主要涉及「當用漢字字體表」、「人名用漢字」與「表外漢字字體表」相關的問題，後者則涉及 JIS 漢字及非正式簡字的問題。

本文旨在將簡體字系統體系化，以便協助從事日語教育領域的教師與學習者在資訊處理、作文與論文指導時，能夠掌握正字體與略體字的特點。

關鍵詞：正字、俗字、簡字、康熙字典體、當用漢字字體表

漢字の字体・書体に関する諸問題—漢字施策による標準 字形の定義とその電算処理を巡って—

市川春樹

東呉大學日本語文學系兼任助理教授

要 旨

日本において使用される漢字の字体は、当用漢字字体表に見える字体を拠り所とし、簡略化の理念・程度において繁體字・正體字(康熙字典體)と簡体字との中間に位置づけられている。

本論文では、先行研究で既に指摘されている当用漢字字体表に見える、いわば正字の地位を占める略字と同表外字の非正式の略字の対立から出発し、同表内の字であれど非公式の略字が存在し、また、表外字であれども康熙字典体を規範としつつ、非公式の略字も併用される等の錯綜した様相を整理・体系化した。更に、この問題に更に拍車をかける電算処理での漢字問題を 83JIS を中心として扱う。

まず、日本以外の漢字圏の漢字事情—台湾・韓国の略字・俗字事情に少し触れ、同地域の正字と略字の境界を明らめた後、日本の漢字施策の漢字簡略化と比較し問題提起とし、その上で、日本において漢字施策によってどのように略字・俗字の採用が行われて来たのか、その使用がどのように揺れ動いて来たか考察した。前者は、「当用漢字字体表」と「人名用漢字」「表外漢字字体表」を主とし、後者は JIS 漢字の問題と手書き文字における非公式の略字とを扱った。

本論は、日本語教育領域において、情報処理・作文指導・翻訳指導を行う際、教師及び学習者が正字と略字の概要を把握するに資するべく体系化することを企図したものである。

キーワード：正字・俗字・略字・康熙字典体・当用漢字字体表

Some Problems on Kanji Styles and Calligraphic Forms - Regarding standard glyphs defined by policy and computational processing

Ichikawa Haruki

Soochow University, Assistant Professor

Abstract

In the Japanese language, it is generally considered to be based on the font of the Temporary Kanji set, and concept level be between the traditional characters and the Simplified characters of China.

As pointed out by previous studies, when using the Kanji characters in the Temporary Kanji set, simplified Kanji will have the status of orthographic characters, but those simplified characters not included on Temporary Kanji set would not have the same status. If not be in the Temporary Kanji set, form of Characters based on the K'anghsi dictionary style as the standard. Moreover, written characters still use informal simplified characters. In this paper, I organize and systematize such as intricate aspects and discuss to the problem of Kanji in computer processing, which is further accelerated by the problem of 83JIS.

In order to clarify these issues, we would examine the current situation of Kanji in Taiwan and Korea, and compare it with the simplification of Kanji implemented by the Japanese Kanji policy.

This paper attempts to systematize the Kanji system, to help teachers and students to grasp the outline of orthographic characters and Kanji.

Keywords : Orthodox Kanji, Popular form of Kanji, Simplified Kanji,
The K'anghsi glyphs, Contemporary Kanji character set

漢字の字体・書体に関する諸問題—漢字施策による標準 字形の定義とその電算処理を巡って—¹

市川春樹

東呉大學日本語文學系兼任助理教授

1. はじめに

日本において常用される漢字は、一体全体何文字あるのであろうか。諸橋轍次著『大漢和辭典』には5万字に及ぶ親字が収録されており、『康熙字典』にも同程度の4万7千字を収める。しかし、日常生活に常用される漢字は遙かにこれを下回るだろうことは容易に想像される。とは言え、卓上型の字書であっても6千字以上の親字を持つものが普通であり、漢字は、文字集合としては極めて数が多い。

当用漢字時代の少し古い資料だが、国立国語研究所の漢字調査²によると約3千字となる。これは、令和4年(2022)現在、日本人の人名に使用できる漢字が2999字³であり、新常用漢字表(2010)と表外漢字字体表(2000)の合計が3004字⁴で、常用される漢字が大体この程度として差支えなかろう。尚、日本工業規格(JIS)の漢字コードでは、これを踏まえ比較的使用頻度が高い字を第一水準漢字とし2965字を規定する。本論にて論ずる漢字使用もほぼこの範囲に留まる。

本論では、他の漢字圏に見られない、日本特有の漢字使用を問題意識と研究動機の主軸としている。すなわち、漢字表内の字に限っ

¹ 本稿は2020年10月17日国立政治大學にて行われた國際研討會東亞漢字文化的傳承與創新で発表した「漢字施策がもたらした字体・書体に関する諸問題—漢字圏学習者に対する筆写指導を考える—」に加筆訂正し改題したものである。

² 国立国語研究所(1963)及び国立国語研究所(1976)参照。

³ 本稿でも、正式名称に因み「人名用漢字」と呼称する。尚、字数は、常用漢字の異体字—いわゆる旧字体も含んだ字数である。

⁴ 正式名称は「常用漢字表」だが、改訂前と区別する為、文化庁が使用した仮称で、報道でも使用された「新常用漢字表」の名称を本稿でも使用する。合計字数は、表外漢字字体表の1022字の内、後に新常用漢字表に追加された154字を差し引いて加算した。

て簡略化された字体⁵を用い、これを正字とし、表外の字は伝統的な字体を用い、これを印刷標準字体として、略字は非公式のものとする⁶。更に、計算機上で漢字を扱うことが多い今日、これに加えて、本来 非公式のはずの表外字の略字にも文字集合内でコードが与えられ使用できる。計算機における文字コードの問題については後述するが、これも一層、正字になった簡易字形であるのか、非公式の略字であるかの境界を曖昧にしていると見て良からう。これに後述の表外漢字字体表の簡易慣用字体や人名用漢字における簡易字形が加わり、正字と略字の関係が一層錯綜する結果となった⁷。

2. 研究動機及び先行研究回顧

漢字文化圏における漢字使用を主題として、語義の差異や字体の差異、それに伴う日本語教育上の留意点に言及した研究は少くない。兒島(2003)や安岡(2017)のように漢字圏を俯瞰して漢字字形の相違を論じているものや、日本語教育の領域では漢字指導を前提とした語義の相違に関する研究がある。特に兒島は、表外漢字の字体が日本語教育にもたらす影響に言及し、常用漢字字体について、その簡易字体の字源は多くが過去の文献に見出されることを指摘した。これは、簡易字体が字体源を遡れば、古くは楷書が確立した唐代から存在し、使用されてきたことを示唆し、簡易字体もまた漢字圏共有の字形であることを暗示するが、近代以降の漢字施策を主要因として、独自路線に至ったのを事例を挙げ明らめた点は注目に値する。

⁵ 新常用漢字表内の字の内、特に、國・一・国・體・一・体のような関係に言及する必要がある場合は、後者を「簡易字体」として「略字」と用語として区別を図った。

⁶ 字体を示す用語としては、正字体・旧字体・俗字・略字・当用漢字字体・簡易字体のように様々に呼ばれるが、本稿では、新常用漢字表内に例示される字及び表外漢字字体表に例示される印刷標準字体を正式な字体という意味で正字と呼称し、それ以外の非公式の簡略化された字を略字と呼称することにする。

⁷ 実例を挙げると、「𪛗」「𪛘」は常用漢字である為、これが正字であるが、「蠟」「澆」は表外漢字である為、「蠟」「澆」が印刷標準字体となり、更に「蠟」は簡易慣用字体として許容、「澆」はあくまでも俗字といったように文字集合として各字がどの様に定義されているか把握する必要がある。

日本語学習者の漢字学習とそれへの支援という観点からは、1960年代半ばから点々と出現しているが、管見では、西田直敏(1963)が外国人学習者に対する漢字教育に言及した嚆矢である。

漢字系学習者・非漢字系学習者という、今日我々が馴染んでいる概念も早い段階で指摘されている。さりながら、漢語の誤用や母語の干渉、漢字音の差異等の要素に比べ、漢字圏における漢字使用の実態、そして教師・学習者の立場から字体・書体差をどう処理するかについての研究は、兒島(2003)を除いて立ち遅れていると言える。

更に言えば、「漢字系学習者」をほぼ「中国人」と同一視して、語学教育に絡む漢字字体の問題を簡体字対当用漢字字体で捉える向きがあり、日本の漢字施策を巡る字体・書体の錯綜にまで言及できていない嫌いがある。況や、他の地域の俗用の略字と当用漢字字体・表外の略字の対立という観点の欠落は否めないだろう。このような中で、曹喜澈(1994)は90年代当時の日本と韓国の漢字使用の差異に注目し、字体差にも言及している。漢字文化圏における漢字の字体・書体を扱った研究の内、簡体字対常用漢字ではなく、康熙字典体と当用漢字字体、正字と略字という観点から考察した研究は、台湾や港澳地区ではなく、寧ろ80年代以降漢字の使用が急激に減少した韓国の研究者によるものが目立つ⁸。理由について、筆者は、諺文専用・漢字併記・國漢混用を巡る曾て「五十年文字戦争」と呼ばれた民族主義的思想が絡む論争の中で、漢字存続派が漢字の国際性と漢字が既に韓国文化の一翼を成すとの強調へと変向していることと無関係ではなかろう⁹と見る。とまれ、韓国の研究者による数々の研究成果は、漢字文化圏の俯瞰という視座を与えてくれる。

本論は、かかる先行研究の理念を下敷きに、参考として韓国及び台湾の漢字字体と俗字・略字事情にも少し触れ、論点を日本の漢字簡略化と康熙字典体の関係に移し、康熙字典体を範とする伝統的

⁸ 日本語教育や韓国語教育に関係するものだけでも、90年代後半以降、金重燮(1997)・鄭丞惠(1998)・韓在永(2003)といった研究が挙げられる。

⁹ 豊田(2012)も参照のこと。

体を使用する地域の日本語学習者に対する漢字指導で問題となり得る点を指摘していく。尚、本論では、中国の簡体字を対象から外すことは既に述べた通りだが、他にも先行研究の乏しさ、筆者の手元に資料がない、また当該地域に関する知識を持ち併せないことを口実に港澳地区・東南亜の華僑社会・ヴェトナム・北朝鮮の漢字事情に触れなかったのは遺憾とする所であり、今後の課題としたい。

3. 字体と書体

本節では、問題提起・導入として幾つか字体・書体に関する事例を取り上げてみたい。

日本語を中心とする場合、明治時代以後の書写体と活字体との乖離と、過去において筆写体が出版においても好まれたこととにまず注目しなければならないであろう。漢字問題において、字体差・書体差に比べ、書写体・活字体の乖離はしばしばおごなりにされる観点だからである。

室町時代末期から木版本を中心とした出版文化が花開くなかでも、楷書体と分ち書きは主流とならず、草書の漢字に連綿体のカナを交えた書体が好まれ、行書・楷書を用いる場合でも手書きの文字と異ならなかったが、一部で明朝体による題字も使われ、明治期にはいり活版印刷の盛行につれて、初期には連綿体活字も試みられたものの、次第に明朝体を基調とする分ち書きの活字による活版印刷物が読む文字として支配的となっていた。しかし、手書きの文字は、依然として草書・行書を交えて書くのが日本人の文字生活として一般的だった。書く文字と読む文字が異なっていたのである。

このような状態は、漸進的に日常の手書き文字が行楷及び楷書体に移行しつつ、活字と手書き文字が接近することで解消して行くが、この動きが決定的になるのが、漢字政策として、手書き書体・字体と活字書体・字体が一致すべきとの理念の下、当初の「当用漢字表(1946)」に大幅に変更を加えた「当用漢字字体表(1949)」からである。それでも、我々は明朝体のような印刷体で文字を書くのは極めて稀

であるし、印刷体として手書文字風の書体を活字に用いるのも稀である。従って、字体差はともかく、「当用漢字字体表」によって、手書と活字書体の乖離が消失したとするのは早計である。特に同表が漢字制限としての色彩が濃かったのに対し、社会では表外の漢字使用も珍しくなく、更に 70 年代末に漢字入出力装置が開発され、81 年の「常用漢字表」が漢字使用の目安となり制限ではなくなった。その後の電子機器の目覚しい発展によって表外漢字の使用が増加し、前述の正字ならざる略字の問題を際立たせた。

次に漢字文化圏へと俯瞰的視点に切り替えてみる。我々が漢字文化圏をめぐる漢字問題に注目する際、各国の漢字施策や漢字音・漢語語彙の比較に比して等閑にされている部分がある。簡体字使用地域を除いた漢字簡略化の比較である。日本独自の漢字施策を中心とした先行研究は非常に少ない。一方で、漢字圏各国で標準とされる字体・書体の異なり自体については多くの研究が指摘する部分であり、簡易字体・略字についても対照研究がある。平成 26 年(2014)に「日中韓共通漢字」808 字¹⁰が発表された際にも、該漢字表は異なりを総て字体の違いとして列記していた。しかし、これを総て字体の問題と考え、標準字体の異なりだと片づけてしまうには、大きな問題を孕んでいる。すなわち、日本の漢字簡略化は、漢字施策として出された漢字表内の漢字に限って、従来非公式だった略字が伝統的字体に取って代り正字となる一方、人名用漢字や簡易慣用字体、JIS 漢字における拡張新字体の採用、新聞社独自の略字採用、そして活字以外にも手書きの略字がありと重層をなす略字事情に加えて、活字と書写体を一致させるべきとの当用漢字字体表以来の理念から、書体差¹¹と捉えるべき問題が字体差だと扱われる。このように概括しただけでも、簡易字体と略字、書体と字体の境界が錯綜していることが分かる。更に、これに異体字・本字・俗字・古字といった要

¹⁰ オンライン資料として各国の資料が見られる他、書籍としては韓国の出版社より 서예나(2014)等数冊鉛槧に付されている。

¹¹ 活字においてはデザイン差とも呼ばれるが、本稿では書体差に統一する。

素が加わると、出版業界でも処理に苦慮しているようである。少なくとも単純に、俗に言う正字と略字、旧字体と新字体のような二元対立では処理しきれない問題があることを理解しておくべきである。

もちろん、現行の漢字施策は「当用漢字字体表」の流れを汲んでおり、これを基準にする方法が権威的なのだが、同表には、書体差と字体差を混同している嫌いがあり、漢字文化の共有という観点から、今回は一先ずこの権威を懐疑的に見ることにする。

本論の立場は、漢字施策の中で生まれた「標準」を絶対視せずに、「活字体・筆写体の分離」と「書体の包摂」とを念頭に、「書体と字体の混同」と「筆写体と活字体は一致しているべき」という観念が、とりも直さず、アソビのない硬直化した「標準字体」を要求する現状を批判的に捉えることを主眼とする。それと関連して字体と書体、そして、異体字・俗字・略字を単純化して捉え過ぎている嫌いはないか、今一度反省の視点を以て振り返る必要があるとも考える。殊に字体と書体、筆写体と活字体という視点は日本語教育における漢字圏学習者に対する漢字指導において重要な観点であると思われる。

4. 韓国・台湾における略字事情

日本語学・日本語教育の分野において漢字の簡略化をめぐる政策で取上げられ、また引合いに出されるのは、当用漢字字体表(1949)と中華人民共和国の简化字总表(1964)であろう。漢字文化圏における政策的漢字簡略化という点にでは、似通ったように思われるが、前者は、漢字表内字に限った各字の簡略化なのに対し、後者は部首の簡略化も含まれ、全漢字に応用する点では異なっている。

これには筆者も異論はないが、一つだけ指摘しておきたい点がある。簡体字の理念は、徹底していて、字体は勿論、書体の統一も行い、手書き文字と活字とを一致させるという理念を忠実に遂行した¹²。一方で、当用漢字字体表が完全に簡体字の理念と相反するかと

¹² 最新の「通用规范汉字表」(2013)も含め、楷書体に近い独特の書体で例示され

言えば、前述のようにそうとも言い切れない。手書き文字と活字との一致という点においては、当用漢字字体表内の字に限れば、理念としては似通っている。但し、手書きと活字の一致を表内字のみに留め、一、略字の採用も表内字に限って個別に行った、二、手書き文字と活字の差をなくした例示字体の使用が同表で最初で最後になっている点では、第一批簡體字表(1935)に擬えるのが適当かと思われる。同表の註記には、「本表所列之簡體字，包括俗字、古字、草書等體，俗字如「体、宝、岩、蚕」等，古字如「气、无、処、广」等，草書如「时、实、为、会」等，皆為已有而通俗習用者。」とあり、草書に由来する楷書化した俗字を積極的に採用していること、劃数の少ない古字を採用している点が当用漢字と異なる¹³。当用漢字中、書体差と考えられるものを除き、簡略化した字を集めると 230 字となり¹⁴、異同はあれど字数は概ね似通っている。第一批簡體字表は、「簡體字應暫緩推行」として結局行われず、約 30 年後の簡化字總表まで漢字の簡略化は棚上げされる。

日本の当用漢字と中国の簡体字が簡略化の方策において差異を強調される一方で、台湾・港澳の繁体字と日本のいわゆる旧字体(康熙字典体)・韓国の正體字(康熙字典体)がしばしば漢字の集合としては同質のものとして見られる点は気になる。日本のいわゆる旧字体と韓国の正體字とは、一部の固有漢字を除いて、活字体においてはほとんど同質であると言えるが、台湾の繁体字は全く康熙字典体と一致するわけではなく、楷書に近い書体を取り入れたものがあり¹⁵、また、以下に示すように、韓国や日本で使っている、または、使っていた字体とは異なる字体が正字として採用されたものもあること

ている。

¹³ 当用漢字においても、古字として「竜」、草書由来の字として「会」が挙げられ、戦前常用漢字表(1931)には「走」といった行書由来の略字が見られる。

¹⁴ 筆劃の向きの変更など劃数の減少がないもの、一、二劃のみの減少で字形が殆ど変わらないものは、書体差と考え、これを除いて数えた結果である。

¹⁵ 二点之繞(康熙字典体)と一点之繞(楷書体)が良く知られる。この他書体差と見るべき代表例として「骨-骨、潮-潮、廟-廟、青-青」がある。

は指摘しておきたい¹⁶。従って、少なくとも差異を強調する文脈において、これらを同質のものとして片付けることは(日本の“旧字体”と韓国の“正體字”は措くとして)、二重基準であると言えよう。

韓国では、康熙字典体に近い伝統的な字体が使用されていることは、非常に良く知られており、漢字施策による漢字表としては、「漢文教育用基礎漢字」が引合いに出され、同表に基づく字体が概ね使用されることが知られている¹⁷。例示の字体は明朝体によるが、康熙字典体をそのまま楷書化した書体も漢字教材に見られる。略字の使用についての資料は多くないが、曹喜澈(1994)が朝鮮日報社において独自に制定した略字を若干使用していたことを指摘している¹⁸。これは、本稿では特別には取り上げなかったが、朝日新聞社がかつて使用したいわゆる「朝日文字」¹⁹を連想させるもので興味深い。教育分野においては、1967年文教部が初中高校で教える1300字中、複雑な漢字542字について略字を制定・発表したが1970年の学校教育における漢字全廃により実施されることはなかった。前述の朝日文字と同様の言い方をするならば、差し詰め後述の実行されることがなかった日本の戦前の常用漢字表のような徒花とでも言ったところか。蛇足であるが同年に韓国新聞協會は、新聞紙上で使用する漢字の目安として2000字の常用漢字表を発表している。

一方で漢字を常用していた時代の手書き文書では楷書による書

¹⁶ 参考として台湾の繁体字と康熙字典体との違いを幾つか挙げる。異体字の関係であると考えられるもの「眾-衆 冰-氷 沉-沈 潛-潛 鄰-隣 讎-讐 翻-翻 卻-却 腳-脚 鑒-鑑 豬-猪 貓-猫 鷺-鵒」。書体差であると考えられるもの「青-靑 瓶-瓶 強-強 真-眞 為-爲 衛-衛 乚-乚 等多数」。

¹⁷ 漢字全廃は撤回された1972年に制定、2000年一部改訂。中学校用900字と高等学校用900字に分れる。それ以前は、1951年に教育漢字として「常用一千字表」が制定され、57年に300字が追加された。1964年にこれが「臨時制限漢字一覽」となり、1970年の学校教育における漢字全廃まで使用された。

¹⁸ 1967年韓国新聞協會は、2000字の常用漢字表を発表している。

¹⁹ 表外字の使用に当たって、これにも当用漢字字体表の造字原理を適用して簡略化した字体。本稿ではJIS漢字の拡張新字体に殆どの朝日文字が含まれることから、特に章を立てて論じなかった。

写も見られ、また略字・俗字も使用されていた。但し、日本における当用漢字、中国における簡体字のように政策的裏付けはなく、僅かに大法院規則「家族關係의 登錄 等에 關한 規則 第 37 條(人名用漢字의 範圍)」に「② 第 1 項의 漢字에 對한 同字・俗字・略字는 別表 2 에 記載된 것만 使用할 수 있다.」²⁰として別表にまとめられているのが唯一で、この他、韓國語文會が実施する全國漢字能力檢定試験において、全級に亘って略字が設定されており、「全國漢字能力檢定 略字目錄」としてまとめられた一覧表が準公式といえる。これによれば、略字の総数は 428 字であり、内 31 文字は 2 種類乃至 3 種類の字体が例示されているので、正字の字母数は 397 文字となる²¹。

当用漢字字体表と共通の字が多く、従来慣用の略字を中心に、簡体字と共通の字や画数の少ない古字や草書の楷書化した文字を交え、同字・俗字でも、画数が少なく略字として機能しているものもあると看做して略字と同等に扱っていること、書きやすくとともに劃数が減らない字は、略字として扱わない、略字としての実用が疑われる字は排除されていることが挙げられる²²。

台湾の略字・俗字事情は非常に複雑である²³。活字として使われる略字が非常に少なく²⁴、また、これを体系的に整理して実用に供する漢字表のようなものがなく、大部分が筆写体でのみ使用する文

²⁰ 原文を漢字表記に直した上で引用した。原文は、「法制處 法令情報 터」のサイト<<https://www.law.go.kr/법령/가족관계의등록등에관한규칙>> (2022/2/11 閲覧)より確認できる。

²¹ 韓國語文會が公開している略字・俗字一覧表(<http://www.hanja.re.kr>)を参照のこと。

²² 「解・陰」が前者の代表例として、「杰・円」が後者の代表例として註記に挙げられている。

²³ 臺灣慣習研究會(1905)の第五卷第六號「雜錄」に“臺灣略字集”と称して、61 文字の略字が紹介されており、また片岡巖 (1921)にも「第十五章 臺灣人の日用文字其他 第四節 略字」とあるのが見えるが、内容は上の“臺灣略字集”と全く同じである。

²⁴ 台(臺)、証(證)、綉(繡)、鏤(鏤)、卓(點)、刈(割)、灶(竈)といった字は印刷体でも見られる。

字であるからである。1982年に教育部が発表した「常用國字標準字體表」では、楷書体で字体を例示し、略字・俗字は示されていない²⁵。従って、使用には個人差が大きいことが予想され、普遍的なものと看做して良いのか慎重に見る必要があるし、字数として合計で何文字あるか、把握することも難しい。筆者の調査では目下450字程、一般に通用されていると看做して良いであろう例を確認している。但し、行書・行草・草書体で崩して書いた例は一切含めていない。これは字体の問題ではなく、書体の問題に属する為である。

このように伝統的字体の中の略字という考え方をした場合、常用・俗用の次元に限れば、200～300字が精々のようで、これは換言すれば、これらの字のみに注意すれば、少なくとも日本・台湾・韓国の間では漢字共有という面において差支えないことになるだろう。

つまり康熙字典体を規範とする正字があり、その略体としての略字という位置付けで論ずる場合、二元的に扱え、日本・台湾・韓国個別の漢字政策を考慮する必要もない。しかし、日本の漢字政策においては、常用漢字表内の漢字は略字・俗字が正字として扱われ、更に字体差とすべき字と書体差とすべき字があり、表外漢字は康熙字典体を正字とし、その略字も非正式ながら使用され、それが更に計算機上で扱える略字と扱えない略字、簡易慣用字体として正字に準ずる地位を得た字といった具合に二元的対立で処理できるものではなくなっている。そこで、ここでは、比較の対象として日本の当用漢字字体表を論点として字体・書体の錯綜を論ずるに先立ち、韓国・台湾の略字・俗字について少しく言及してみた。

【表1】参考：韓国の略字 <一覧省略>²⁶

²⁵ 香港教育署(1986)『常用字字形表』では、同様に楷書で字体が例示されているが、康熙字典体や俗字・略字・異体字が一部例示されている。

²⁶ 註25で挙げた資料の他、韓國語文會指針書に指定されている漢字能力検定試験の参考書類にもこの略字一覧が附録として収録されているので参考にできる。

【表 2】参考：台湾の略字 <省略>²⁷

5. 日本における略字・俗字概説

本節では、日本における略字について述べる。ここで述べる略字とは、「当用漢字字体表」において従来の活字とは異なる形になったすべての字を指すのではなく、当用漢字以前の漢字表に示された簡易字形・俗字、そして昭和 26 年(1951)「人名用漢字別表」²⁸を嚆矢として、幾度も追加されている人名用漢字、そして常用漢字表・新常用漢字表²⁹に伴って採用された簡易字形を指すことにする。以下、時代を追って概観する。

日本における略字・俗字の使用は、古くからあり³⁰、例えば「灵・灾」といった劃数の少ない古字を使用したり、簡体字のように筆画を省略した字もある³¹。これらはいわゆる崩し字と呼ばれる草体とは別個の体系と看做すべきである。明治期以後活版印刷が盛んになるに従い、書体よりも字体の方に焦点が移った。漢字の簡易化というと、政策的に作られた漢字表に目が行きがちであるが、活版印刷文化が産声を上げた明治初期から、通俗の略字・俗字が紹介されている書籍は存在する³²。但し、これは、活字として使用されるべきものでなく、あくまで手書きのみで用いる文字として紹介されているに過ぎない。とは言え、これらの資料は大量の手書き文書を精査することなく、常用略字の使用実態を把握できる有用なものである。

²⁷ 紙幅の関係上、どうしても収録できなかった。稿を改めて紹介したい。

²⁸ 1951 年 05 月 25 日官報「告示 人名用漢字別表」。

²⁹ 正式名称は「常用漢字表」のままで、新旧区別する為便宜的にこう呼ぶ。

³⁰ 伊地知鐵男(1966)参照。

³¹ 中には「检(檢) 梦(夢) 笔(筆) 爱(愛) 浊(濁) 丽(麗) 罗(羅) 庙(廟) 阳(陽) 达(達) 师(師) 吴(吳) 应(應) 枣(棗) 网(網) 执(執) 欢(歡) 妆(粧) 毕(畢) 华(華) 尔(爾) 齐(齊) 爷(爺) 众(衆) 兴(興) 归(歸) 从(從) 丝(絲) 无(無) 义(義)」のように現行の簡体字と全く同じ字体もある。

³² 筆者の調査で国会図書館に所蔵の関連資料の内、1919 年『漢字整理案以前』に略字が紹介される資料が 18 点程存在することが判明した。類型化して二三紹介すると、原胤昭(1903)『萬用字引』のような辞書類、安達常正編(1909)『漢字の研究』のような漢字関連書籍、山口縣室積師範學校編(1916)『國語要覽』のような便覧類が見られる。

ここでは、当用漢字字体表から一旦離れ、それ以外の国語政策による字体の変更をまとめることにする。書体についての調査は、次節で取り上げることにする。

略字体の国語政策としての採用は、大正 12 年(1923)臨時國語調査會が発表した「常用漢字表」が嚆矢である³³。同 5 月 12 日付の『官報』『附録雜報』に「決定された常用漢字及び略字について」と題して国語学者の保科孝一が常用漢字選定の顛末を解説し、154 字の略字表を附している。昭和 6 年(1931)にはこれを修正した表が発表されているが、略字体は変わらず 154 字である。そして、昭和 17 年(1942)「標準漢字表」に 142 字、昭和 21 年(1946)「當用漢字表」に 131 字の略字が示されるが、内容には異同がある³⁴。「戦前常用漢字表」と「當用漢字表」において採用された略字は概ね重複しているが、「戦前常用漢字表」では簡体字のように草書を楷書化した俗字を採用したり、より簡略化された字を採用しているのが特徴である³⁵。

【表 3】「戦前常用漢字表」「標準漢字表」「當用漢字表」共通の略字〈省略〉³⁶

3 つの漢字表を比べて見た時、次の様なことが言える。「標準漢字表」に採られた略字は使用頻度が高いものであり³⁷、言い換えると保守的だと言える。2528 字と漢字表としては最多であるにも関わら

³³ 昭和 6 年に改訂される。以下昭和 6 年改訂版常用漢字を区別の為「戦前常用漢字」と呼称する。

³⁴ 三者に共通する略字は計 91 字である。

³⁵ 「當用漢字表」の略字の内、「戦前常用漢字」に見えないのは、25 字で、逆に、昭和六年常用漢字表の略字中、「當用漢字表」に見えないのは、47 字だった。

³⁶ 6. 結論に、本論で取上げた資料総てに共通の略字を掲げた。参考にされたい。

³⁷ 前述の俗用の略字が紹介された書籍が提示する略字とほぼ同様であり、最も常用の文字のみが採られたことが分かる。更に、後の「当用漢字字体表」「常用漢字」「人名用漢字」簡易慣用字体及び新常用漢字の略字体でも採用されなかった字は、「気畠全桧淵湊箆罐鑄鶯」の 10 文字のみで、この内「桧湊箆鑄鶯」は 78JIS・83JIS で簡易字形として採用されている。

ず、「戦前常用漢字表」や「当用漢字表」と同程度の略字しか採用していない。「戦前常用漢字表」は、草書を楷書化した略字を採用したり、些少な差異に留まる略字を採用したりしているが、簡略化が限定的である面では、「当用漢字表」と同様である。「当用漢字表」に採られた略字は、「標準漢字表」に比べ字数を増したものの、「戦前常用漢字表」と違って行書・草書を楷書化した字体は採用していない。後の当用漢字字体表でも同様の傾向が見られ、これが活字における略字の方向性となったと言える。

この方向性が大きく転換するのが昭和 24 年(1949)の「当用漢字字体表」である。これは後述する漢字の書体の整理についての腹案を反映させたもので、例示字体は明朝体活字や楷書体活字ではなく、手書き文字に近い文字で例示されている。大正 8 年(1919)の『漢字整理案』で示された「簡便ヲ主トシ、慣用ヲ重ンジ、活字體ト手書體トノ一致ヲ圖ル³⁸」という理念が色濃く反映された漢字表で、書体の統合にまで踏み込んだ漢字表はこれが初めてであり、今日の日本の漢字使用の規定における分岐点となっている。

「当用漢字字体表」は漢字の字体・書体に関する研究でしばしば取り上げられるが、その後の動きとして些細ながらも無視できないのが、「人名用漢字表」である。人名用漢字表は別表二にて常用漢字の異体字(殆どが康熙字典体)の一部を使用可能とし、一の表でも、簡略化した字体や異体字・書体差のある文字を 18 字認めている³⁹。尙、最初期の昭和 26 年(1951)人名用漢字表では、龜(龜)・弥(彌)が含まれるが、これらは平成 26 年(2010)の新常用漢字表に簡易字体で含まれることになったので現在の人名用漢字表には載っていない。簡易字形を採用した字の中で、「芦」のみは例外的に本の字の「蘆」は

³⁸ 頁 1、同案凡例(二)。

³⁹ 亘(亘)・凜(凜)・堯(堯)・巖(巖)・眇(晃)・桧(檜)・楨(楨)・渚(渚)・猪(猪)・琢(琢)・祢(禰)・祐(祐)・禱(禱)・祿(祿)・禎(禎)・穰(穰)・萌(萌)・遙(遙)がそれである。

使用できないことになっている⁴⁰。

次に、前述以外で見られる字体・字形の変更について概説する。1981 年(昭和 56)の常用漢字表では、漢字の追加と共に、4 字の字体を罐→缶、螢→蛍、龍→竜、燈→灯へと変更している。蛍・灯は慣用の略字で、缶は別字缶(フ、ほとぎ)であるが、罐の略字として用いられていた字であり⁴¹、竜は龍の古字である。これらは純粋な意味で筆劃を減少させた略字と言えるものである。

平成 12 年(2000)表外漢字字体表の答申に伴って、大部分の漢字は康熙字典体を印刷標準字体としたものの、同表の全 1022 字の内 22 字については、「現行の JIS 規格や新聞など、現実の文字生活で使用されている俗字体・略字体等の中から、使用習慣・使用頻度等を勘案し、印刷標準字体と入れ替えて使用しても基本的に支障はないと判断し得る印刷文字字体」として簡易慣用字体が示された⁴²。これは、一字種一字体、手書と活字との一致を建前として来た漢字施策の中で、2 字体の併用を黙認する劃期的な判断である。しかし、実際には、これらの字体は JIS78 及び 83JIS で既に取り入れられていたこともあって、計算機による文書作成では既に広く併用されており、現状の追認ともとれるものであった。

【表 4】簡易慣用字体一覧 印刷標準字体(簡易慣用字体) <省略>⁴³

⁴⁰ 法務省法制審議会人名用漢字部会第 5 回会議議事録 20 頁：「『あし』につきましては、異体字の印刷標準字体よりも芦屋市の『芦』の方が、簡易慣用字体の方が順位が上位でございます。しかも、要望が 3 あります。他方、印刷標準字体の方はございません。しかも、平易性から言うと『芦屋市』の『芦』の方が明らかに平易かなとも思いますので、こちらについては例外的に印刷標準字体ではなくて簡易慣用字体の『芦』の方を採用するのがよろしかろうかと思っております」(平成 16 年 7 月 23 日)

< https://www.moj.go.jp/shingi1/shingi_jinmei_index.html > (2022/2/11 閲覧)

⁴¹ 観→観・權→権と同じ原理の略字として「罐」が挙げられる

⁴² 詳しくは、文化庁国語施策第 22 期国語審議会「表外漢字字体表作成の概要」中の簡易慣用字体の選定基準を参照のこと。< https://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/sisaku/joho/joho/kakuki/22/tosin03/index.html >

⁴³ 「表外漢字字体表作成の概要」に印刷標準字体(簡易慣用字体)一覧表を収録。

それから約 10 年後 1981 年以來 30 年ぶりに常用漢字が改訂され、字の追加と共にその内の 10 字については字体が変更された⁴⁴。

新常用漢字表では、簡易慣用字体(2000)において既に採用されていた曾・瘦・麵がそのまま正式の字体として採用されている他、「標準漢字表」(1942)において略字として例示され、昭和 26 年(1951)に人名用漢字として提示された 92 字に含まれる龜・弥がはいっている。この 2 字は、既に略字が慣用されていて、常用漢字でこれを追認したものと言える。今回の追加の特徴は、曾・瘦・剥・頰・餅と云った書体差として捉えるべき字が見られ、略字と看做すべき字と勢力を二分していることである。

最後に異体字の統合について述べて置く。国語国字問題における異体字の扱いを巡っては、当用漢字字体表では、異体字の整理が行われたと指摘されている。しかし、同表で実際に異体字の統合として取り上げられているのは、「効(效)・叙(敘・敍)・姉(姊)・略(畧)・島(嶋)・冊(册)・商(商)・編(編)・船(船)・満(滿)」の 10 組のみで、しかも「商・編・船・満」は、書体差と捉えるべきものである⁴⁵。姉(姊)・略(畧)・島(嶋)はより使用頻度の高いものを採用したと取り敢えず結論づければ、純粹に取捨選択がなされたと言えるのは、効(效)・叙(敘・敍)の二組のみである。異体字に関しては、活字字体整理に関する協議会(昭和 22 年 10 月)で議論され、「活字字体整理案」として 2 年後の「当用漢字字体表」に反映されている。

結果を見れば当用漢字字体表採択の結果それに漏れた異体字が公的地位から追われたのは確かであるものの、同整理案は、書体の選択という側面が強く、数多い異体字を一つ一つ検討して整理や統合したというよりも、常用字について使用頻度が高い字を例示字体として代表する字体を選択したと言った方が適當であろう。以下に

⁴⁴ 字体変更は以下の通り。艶→艷、龜→亀、曾→叢、瘦→瘦、填→填、剥→剥、頰→頰、麵→麵、餅→餅、彌→弥。

⁴⁵ 船は、姓名に使われる「舩」という異体字も見られる。

「整理された」とされる字とその異体字の一覧を掲げた⁴⁶。異体字は比較的知られ、近代以降に使用例があるもののみを参考に掲げた。

5.1 計算機上における漢字の処理に関する問題

日本語電算処理における漢字問題は漢字問題は非常に複雑である為、一節を設け、なるべく順を追って簡潔に述べる。

この問題を一言で定義するならば、略字または俗字と正字たる簡易字体の境界の明確化である。すなわち、正字としての地位を付与された簡易字体と非公式の略字が計算機上に渾然一体となり、非公式の略字が正字(印刷標準字体)よりも高い地位を与えられる(高使用頻度の領域に割り当てられる)例もある始末で、出版業界の校正担当者など専門知識を持つ者を除いては、この境界が模糊として判断に困ることが多々ある。更に、書体差の問題、すなわち包摂基準の遷移が加わるとお手上げ状態である。一見、複雑な字体と簡略化された字体が計算機上に並存するだけの問題に見えるものの、実の所様々な問題が輻輳しているのが現実である。

5.1.1 書体に関する諸問題

書体の問題、手書と活字の問題については、平成 28 年文化審議会国語分科会漢字小委員会において「常用漢字の字体・字形に関する指針(報告)について」で本論で扱っている問題が、詳述されている。

大正 8 年の『漢字整理案』、昭和 13 年の『漢字字體整理案』以来の懸案で、実に 100 年近くに及ぶ懸案である。

計算機による文字処理が当然のものとなり、活版印刷すら過去のものとなった今日、我々が正式の文字として捉える漢字は、計算機

⁴⁶ 参考として、同表において純粹に異体字の統合と見られる例を掲げる。回(回・囘) 却(卻) 脚(腳) 糾(紉) 凶(兇) 叫(叫・詈) 胸(膺) 群(羣) 携(携・攜・攜) 考(攷) 効(效) 座(座・坐・坐) 柵(柵) 冊(冊) 雜(雜・襍) 姉(姊) 紙(帋) 呪(咒) 収(收) 叙(敍・敘) 松(柗) 粧(妝) 冗(冗) 場(場・坊) 唇(脣) 世(卼・卼・卼) 跡(迹) 仙(僊) 善(善) 窓(窗) 恥(耻) 腸(腸) 勅(敕) 沈(沉) 哲(喆) 島(嶋・寫・壘) 答(荅) 肉(宐) 峰(峯) 略(畧) 隣(鄰・鄰) 隸(隸)

に定義され、打ち出されるそれであり、また、それが標準であるとの意識すらある。そして、ここから外れた文字は幽霊のように存在せざるが如く扱われることが少なくないのが現状である。実際に簡易慣用字体に選定された字は、「使用頻度を考慮した」としているが、実際には総てが 78JIS・83JIS に定義された字であった。同規格では漢字政策によって劃定されていない簡易字体も定義され、更にそれが印刷標準字体よりも優先される文字として定義された結果、環境によっては印刷標準字体⁴⁷が使用できなくなり、混乱を招いた⁴⁸。

まず最初に挙げられるのが、漢字に書体の標準を求める難しさである。活字体と筆写体の違いは書体差としても自明のことであった。しかし、これが大きく転換するのが前述の「当用漢字字体表」(1949)である。これは、それまでの各漢字表や後の常用漢字表と違い、謄写版印刷によると思われる手書体にも活字体にも見える珍妙な文字が例示字体になっている。『現代字体辞典改訂新版』(講談社)によれば、「かつての当用漢字字体表では、芸術性・装飾性のない、なるべく客観的な見本として、線の太さに変化をつけない記号的な字形を示した」のが理由だとしている。活字体の筆写体の距離を一気に詰めたこの雛型は活字体としては余りに奇抜であるし、また、手書文字としても奇怪である。かような書体が用いられたのは、これが最初で最後であり、後の人名用漢字や常用漢字では、戦前の漢字表や「常用漢字表」と同じく明朝体での例示となっている。出版物としての美的効果から見ても、筆写効率を考慮しても活字体と筆写体を完全に一致させるのは結局無理な話であった。

筆写体と活字字体とを一致させようとする企図は、各漢字表において「当用漢字字体表」のみに見られるものであり、後の常用漢字表では主として印刷文字からの検討となり、表外漢字字体表におい

⁴⁷ 特に表外漢字字体表に例示された字体をいう。

⁴⁸ 「標準漢字表」等に例示された比較的一般的な字が採用されたが、第一水準・第二水準入替及び字形変更を行ったことは、標準字形をなるべく一つにし、当用漢字表表外の字は伝統的な字形を用いる原則に反するものだった。

でも「表外漢字字体表」は印刷文字を対象とし、手書き文字は対象としていません。」とし、また簡易慣用字体を例示することで、印刷標準字体と簡易慣用字体、つまり正字と略字との併存を認める方向となった。平成 22 年常用漢字においてもこれを継承し、筆写体と活字、デザイン差について言及している。「当用漢字字体表」の姿勢は、字体・字形の統一、字体の簡略化、書写体と活字体との一致に集約することができよう。結局の所、文化庁(2016)「常用漢字表の字体・字形に関する指針(報告)」について「経緯：漢字の字体・字形については、昭和 24 年の「当用漢字字体表」以来、その文字特有の骨組みが読み取れるのであれば、誤りとはしないという考え方を取っており、平成 22 年に改定された「新常用漢字表」でも、その考え方を継承している。しかし、近年、手書き文字と印刷文字の表し方に習慣に基づく違いがあることが理解されにくくなっている。また、文字の細部に必要以上の注意が向けられ、正誤が決められる傾向が生じている」⁴⁹としているが、前述のように筆写体と印刷体との距離を破壊したのは「当用漢字字体表」の活字と手書き文字とを一致させるという建前であり、「表外漢字字体表」以降の指針は、改めて筆写体と印刷体との距離を認識し直したとも言える。

前述の問題とは逆に、台湾におけるそのように手書きでしか用いられて来なかった略字が文字集合に領域を付与されることによって、俄然「公民権」を得て、計算機上にて正式の字であるかの如く振る舞い始めることがある。日本においては、78JIS 及び 83JIS に関する略字体の採用—拡張新字体と呼ばれる—が最も顕著な例として挙げられよう⁵⁰。ここでは漢字指導と関する問題を幾つか挙げておく。

⁴⁹ 令和改元の際、令の書き方が話題になった。明朝体的な「令」であれ楷書体的な「令」であれ、どちらでも構わないのである。詳しくは、文化庁の「常用漢字表における「字体・書体・字形」等の考え方について」を参照されたい。
< https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/shoiinkai/iinkai_14/pdf/shiryo_3.pdf > (2022/2/11 閲覧)

⁵⁰ 先に取り上げた朝日文字も漢字施策による方針から外れた簡略化という点では、拡張新字体と同様だが、拡張新字体は、一社のみの紙面の問題に留まらず社

一つ目に、前述のように、手書きの略字としてしか用いられていなかった略字が文字集合に取り入れられ、それが漢字変換候補に出現することにより、印刷標準字体との区別がつかなくなることがある一つまり、当用漢字字体表または新常用漢字表・人名用漢字表の範囲を概ね把握していないと判別できないという問題点がある。

二つ目に、略字体の採用の他、略字に正字の領域を付与し、正字を別領域に移すことが行われた。これは、森「鷗」外問題に代表される機器の新旧によって出力される字体が異なる、また、環境によって正字の方を打ち出すことができないことが指摘されている。

語学教育における漢字指導という観点で言えば、このように印刷標準字体と略字の関係の逆転は、学習者に手書きの略字と印刷標準字体の境界を認識しづらくさせる副作用がある。

三つ目に 83JIS に採用されなかった略字もあり、これは採用された字とは逆に、情報機器で文字を扱うことの方が多くなった今日では、前述の計算機上で地位を得た略字とは真逆に、更に地位を低下させる結果を生んだ。前述のように、簡易慣用字体には、JIS 漢字で定義されていない略字は一文字も入選していない。このことは手書きの文字としての略字が失伝する可能性を孕んでいると筆者はみる⁵¹。これは日本語の手書き文化の継承の点でも非常に遺憾である。

5.1.2 78JIS と JIS83 における書体問題—文字コード改変がもたらしたもの

前述の表外漢字字体表(2000)がいかなる理念で作成されたかをおぼいする。重要なことは、印刷標準字体・簡易慣用字体が、「明治以来、活字字体として最も普通に用いられてきた印刷文字字体であって、かつ、現在においても常用漢字の字体に準じた略字体以上に高

会全体に影響を及ぼし得るという点で次元が異なる。

⁵¹ このことは「幽霊文字」と呼ばれる典拠不明または同定不能の文字が、情報機器で簡単に扱える事とは対照的である。「堵壘崙弼捫鼻榜檐蟬祢閏駟」は情報機器で普通に扱える。

い頻度で用いられている印刷文字字体」及び「明治以来、活字字体として、康熙字典における正字体と同程度か、それ以上に用いられてきた俗字体や略字体などで、現在も康熙字典の正字体以上に使用頻度が高いと判断される印刷文字字体」として、慣用を重視し、最も慣行の字体を印刷標準字体と位置付けたことである。

この内の簡易慣用字体は、略字・俗字としての使用実績があり、全数が JIS78・JIS83 で定義されていた漢字である。これが、正字体と同程度か、以上に常用されてきたと言えるかは議論の余地がある。しかし、本節では文字集合の中で、漢字施策で決定された字体と康熙字典体以外にいかに書体・字体の変更が行われたのか、簡単に整理することにする。拡張新字体の問題も含めて、字体の問題も含まれるが、これを別個に考えるのは煩瑣に過ぎる為、JIS 漢字問題として一括して論ずる。また、本節では、文字コードに領域を割当てられた字が実際にどんな字形で出力されるかを焦点とする。

JIS 漢字問題は、JIS83 における拡張新字体問題が著名である。しかし、簡易字体そのものは、JIS78 で既に採用されているものがある⁵²。これは、当用漢字字体以外は伝統的活字に倣いつつ、一部の表外字について簡易字形が採用されたものである。中には「標準漢字表」等に表示されている字形もあり、慣用されている字が簡易字形或いは異体字として採用されたものであると言える。それが JIS83 になると、第一水準と第二水準が入れ替えられ、簡易字形の方が正字扱いとなった。また、JIS83 において第一水準に簡易字形を追加し第二水準に伝統的字体を移動させたものもある⁵³。

そして、JIS83 が批判を浴びる一番の原因となっているのが、字形

⁵² JIS78 において既に採用されていた簡易字形は以下の通りである。書体差と考え得るものは予め除いてある。巖(巖)・楨(楨)・遙(遙)・伋(儘)・壺(壺)・攪(攪)・桧(桧)・栲(栲)・涛(濤)・灌(灌)・砵(礪)・砺(礪)・籠(籠)・藪(藪)・蛭(蛭)・蠅(蠅)・賤(賤)・迓(邇)

⁵³ 堯(堯)・楨(楨)・遙(遙)・瑤(瑤)の 4 文字については、1981 年に人名用漢字として簡易字体が採用されているので 83JIS の変更は必ずしも不適切とは言えない。

変更—すなわち簡易字形のみが定義され伝統的な字形が打ち出せなくなったことである⁵⁴。JIS 規格が前のめりに非公式の略字としてしか使われない字形を採用したことは、後に表外漢字字体表・簡易慣用字体制定の伏線となった。これと同じくこちらは、批判されることは少ないものの 200 字弱の表外字について、書体を当用漢字風に改めている。JIS78 と JIS83 の表外字の略字に対する考え方は、「常用漢字表」と「当用漢字字体表」に似通ったものがある。すなわち、前者は字体のみに手を入れたのに対して、後者は書体にまで手を伸ばした。83JIS の書体が変更された字は、JIS2000・JIS2004 で大部分は伝統的な書体に戻されているが⁵⁵、一部 JIS83 のまま残されている字もある。以下に例を挙げて、その理由を示した。

また、内 22 文字はより妥当な字形へ変更が行われた。他の漢字との体系性を考慮して部首を他の字と同じ形に変更、部首同士の均衡の調節や撥・止、突き出る・突き出ないの変更等である。

JIS78 と JIS83 制定の間には常用漢字の制定を挟んでいる。常用漢字に追加され、且つ字形変更があったものはすべて常用漢字表に準じた字形に変更されている。人名用漢字も昭和 51 年(1976)・昭和 56 年(1981)の追加分については、人名用漢字に示された字形とし、一部の字は JIS83 で先行して採用されていたものが、平成 2 年(1990)での人名用漢字の追加でそのまま採用された。

しかし、内 47 字は、83JIS の字形が維持されている理由が不明である⁵⁶。但し、「冊(册)」を部分として持つ漢字は、括弧内の字形が

⁵⁴ 83JIS における字体変更は幾つかの関連サイトで確認可能である。本稿においては、富士通の HP に公開されている「第 4 部 文字と文字コード」を参考とした。

<https://software.fujitsu.com/jp/manual/manualfiles/m170001/b1x10197/11z200/b0197-04-18-08-00.html> (2022/2/11 閲覧)

⁵⁵ 俱(俱)・剝(剥)・叱(叱)・吞(吞)・噓(噓)・妍(妍)・屏(屏)・并(并)・瘦(瘦)・繫(繫)が JIS2004 で追加された。JIS78 において採用された簡易字形に加え、伝統的の字形を追加したものである。

⁵⁶ この 83JIS で変更された字形の大半が JIS78 の字形に戻るか或いは印刷標準字体が別領域に定義されたのに対し、一部の字が JIS2004 以降も JIS83 の字形を

定義されているものといないものがあり、活字としても曾ては両者が混在していた経緯もあって、「冊」もあながち間違いとは言えない。

こうして、JIS 漢字を巡る混乱は、概ね印刷標準字体へと収斂する形で過去のものとなった。

5.2. 表外漢字字体表の規範意識

手書文字と活字とが交錯する文字政策の一つとして、2000 年 12 月国語審議会答申の「表外漢字字体表」がある。これは、当時の「常用漢字表」に漏れながらも、日用される 1022 字を選び印刷標準字体を定め、内 22 字に「簡易慣用字体」として略字を例示したものだ。

この表外漢字字体表答申の背景となっているのが、前述の JIS 漢字コード(code)の改定、即ち 78JIS から 83JIS への改正に伴い、200 字余りの表外字字体の入れ替えが行われ、従来康熙字典体で定義されていた表外漢字が同一領域に定義された簡略字体で表示されるようになり、機器やソフトにより表示・印字される字体が異なるという混乱を招いた。また、本論と関する部分では、表外字について、略字の方が印刷標準字体であるのか、康熙字典体に基づく伝統的字形の方が印刷標準字体であるのか、扱う者の間でも混乱が見られた。そもそも文字コードは、我々の言語生活を規定する或いは国語国字問題に対して問題提起するものではなく、飽く迄も「こう書かれる・活字でこう表される漢字のコードはこの様であり、JIS としてはこの様な字体を用いる」というもので、書体や符号位置の入れ替え等の小変更ならばともかく、字形・字体の変更にまで及んだのはやり過ぎであった。工業規格である JIS が漢字の在り方に容喙し禍根を

維持し JIS78 の字形に復さず包摂扱いになった理由としては、「拐・概・稽・荊・隙・昂・捌」のように 83JIS の字形が寧ろ好ましい、「溝・濯・殼・栓・扉・頻」のように 78JIS から 83JIS の間に常用漢字に加わり書体が変更された、「渚・翠」のように 78JIS 制定後に人名用漢字の書体が変更された為、前述の例と同じく JIS78 の字形には戻らなかった等、合理的な理由を持つものが多いが、「冴・湮・鯨・終・鯨・鯨・鯨・鯨・鯨・鯨」のように合理的理由を以て説明し難い例もある。

残した悪しき例と言えよう。この後の JIS 漢字改定は 83JIS 混乱の反省を受けてか、非常に保守的で字体の変更には慎重になっている。2004JIS において例示字体を概ね印刷標準字体とする事で文字集合としての漢字問題は一応の決着を見た。表外字の例示字体については、康熙字典体を基準とするのが 2004JIS 以降の潮流となっている。しかし、日本語教育における漢字指導においては、文字コードによる規定に左右され、楷書風の手書き字体と康熙字典体を範とする活字体を混同して右往左往するのは厳に慎むべきことである。

6. 結論

日本における漢字施策を中心に、日本語の漢字指導で問題となる字体・書体問題について簡単にではあるが考察した。その結果明らかとなったのは、「漢字」という遺産を漢字文化圏学習者の役に立てる為には、指導者に字体・書体、また活字体・筆写体の概念が必要で、『校正必携』や『漢字必携』の内容すべてを把握とはゆかずとも、学習者の漢字使用に対して有用な助言ができるのが望ましい。

事細かな筆劃の違いに着目して分析することも無用とは言わない。しかし、本論で述べた通り、既に漢字施策の次元でも「字の骨骼さえ成っていれば、些細な異なりは問わない」としており、初等教育での漢字指導のように、無闇に学生の作文に赤を入れることは、時に無意味でもあるし、やる気を削ぐ結果にもなろう。それと同時に、漢字に対して一つの標準を求めるのがいかに困難であるかも明らかになった。単にどこの漢字と日本の漢字、康熙字典体と常用漢字字体という二項対立ではなく、活字体と筆写体、正字と略字、異体字・古字、楷書を始めとする書体を考慮する必要がある。本論においては、略字・俗字の問題を主に扱ったが、「当用漢字字体表」で示された以外にも多数の略字が使用されており、これらを体系的に整理し、また字体差と書体差とを峻別する事が必要になると思われる。

また、計算機では処理できないような手書のみで用いられる略字についても、本論において論じたことを踏まえれば、筆写習慣とし

て一概に非正式のものとして指導から排除できなからう。特に漢字圏の日本語学習者に対しては、参考筆写体のようなものが提示されると漢字をより有効に使用できるのではないか。これは、華語(繁体字)の学習者についても同様のことが言えよう。

最後に漢字文化圏における漢字文化の継承と発展という面については、次のように結論付けておきたい。簡体字はともかく、韓国・台湾(或は港澳地区)・日本の漢字は、書体差を包摂すると、差異は意外に小さく、その差は数百字の略字・俗字に収斂されることは既に指摘した通りである。しかも、共通の略字・俗字も少なからず⁵⁷、これを考慮すれば、差は更に小さくなろう。共同漢字と同じ理念で、共同略字・俗字の一覧の作成するのも意義があることである。

参考文献：

- 伊地知鐵男(1966)『仮名変体集—増補改訂—』東京：新典社
育英書院(1923)『臨時國語調査會發表常用漢字表』東京：育英書院
李浩銘(2018)「1950年代臺灣的漢字簡化問題」『臺灣學研究』第22期、頁77-108、台北：國立臺灣圖書館
이영희(2016)『外國人을 爲한 漢字語 教育研究(韓國語教育 學術叢書)』、서울：疏通出版社
江藤淳・吉目木晴彦・加藤弘一・白川靜・池澤夏樹・平凡社編(1998)『電腦文化と漢字のゆくえ—岐路に立つ日本語』東京：平凡社
片岡巖(1921)『臺灣風俗誌』台北：臺灣日日新報社
金重變(1997)「外國人을 爲한 韓國語 漢字教育 研究」『語文研究』25卷3號、頁95-113、서울：韓國語文教育研究會
語文教育學院(1986)『常用字字形表』香港：教育署語文教育學院

⁵⁷ 筆写の調査で得られた各種資料の略字に限っても、すべてに共通するものが、若干の筆劃の異なりを無視すれば、「乱仮両剂劳励圉壺学実写宝属廢徑恋担数断荣帰残浅満濟湾営炉独献發礼称経総繼声肅胆台挙旧万処号虫蚕覺触証營変輕辞通辺医积鉄関双体塩麦点党齒」のように67字認められた。それぞれにおいて使用頻度の低い文字まで含めればかなりの数共通の略字が得られると考えられる。

- 小池和夫・府川充男・直井靖・永瀬唯(1999)『漢字問題と文字コード』
東京：太田出版
- 國語協會(1938)『國語審議會發表漢字字體整理案』東京：國語協會
- 國語調查委員會(1908)『漢字要覽』東京：國定教科書共同販賣所
- 國立國語研究院編纂(1992)『東洋 三國의 略體字 比較 研究』서울：
國立國語研究院
- 国立国語研究所(1963)『現代雜誌九十種の用語用字；第二分冊：漢字
表』東京：秀英出版
- 国立国語研究所(1976)『現代新聞の漢字』東京：秀英出版
- 兒島慶治(2003)「日本・中国・台湾・香港における漢字字体の共通性と
相違性」『比較文化研究』62、頁 63-74、福岡：日本比較文化学会
- 芝野耕司(2002)『JIS 漢字字典』東京：日本規格協会
- 慈舒(2013)『通用规范汉字表』北京：语文出版社
- 서예나(2014)『韓中日共用漢字 808：익힘篇』京畿：아울북
- 臺灣慣習研究會(1905)『臺灣慣習記事』台北：臺灣慣習研究會
- 武部良明(1986)「日本語教育と漢字」『日本語学』第 5 卷第 6 号、頁
40-48、東京：明治書院
- 曹喜澈(1994)「漢字系學習者のための漢字教育のあり方—韓国人日
本語學習者を中心に—」『世界の日本語教育』4、頁 61-73、東京：国
際交流基金
- 曹喜澈(1993)「韓国の漢字・漢語事情」『月刊しにか』第 4 卷第 3 号、
頁 76-81、東京：大修館書店
- 鄭愚相(1989)「韓・中俗字의 比較」『國語生活』第 17 號、
頁 51-57、서울：國語研究所
- 鄭丞惠(1998)『外國人을 爲한 國語 漢字 教育 研究』서울：梨花女
子大學校大學院碩士論文
- 豐田有恒(2012)『韓国が漢字を復活できない理由』、東京：祥伝社
- 南基卓(2009)「韓・中・日常用漢字의比較考察(1):國內通用略字의整理
를爲하여」『語文研究』37-4、頁 7-38、서울：韓國語文教育研究會
- 南廣祐(1983)「韓國略字에 對하여」『語文研究』11 卷 4 號、頁 529-

- 544、서울 : 韓國語文教育研究會
- 西田直敏(1963)「外国人に対する漢字教育」『日本語教育』2号、頁27-45、東京 : 日本語教育学会
- 日本エディタースクール編(2011)『標準 校正必携』東京 : 日本エディタースクール出版部
- 日本加除出版編集部編(2007)『人名用漢字の変遷—子の名に使える漢字の全履歴』東京 : 日本加除出版
- 日本書道教育研究所(1977)『書写書道四千字 現代字体字典(改訂新版)』東京 : 講談社
- 野崎邦臣(2013)『漢字字形の問題点—併『平 2 2、常用漢字表』追加字批判』東京 : 天来書院
- 林大(1963)『当用漢字字体表の問題点』東京 : 光風社出版
- 韓在永(2003)「外國語로서의 韓國語 漢字語教育을 爲한 基礎的 研究 : 漢字文化圈 學習者를 對象으로」『二重言語學』23、頁 327-368、二重言語學會
- 文化庁(2016)『常用漢字表の字体・字形に関する指針 文化審議会国語分科会報告』東京 : 三省堂
- 文部省普通學務局(1919)『漢字整理案』東京 : 文部省普通學務局
- 北平市政府自治事務監理處(1935)『教育部公佈第一批簡體字表』北平市政府自治事務監理處
- 安岡孝一(2011)『新しい常用漢字と人名用漢字—漢字制限の歴史』東京 : 三省堂
- 臨時國語調査會(1931)『常用漢字表』東京 : 臨時國語調査會

オンライン資料 :

文化庁「国語施策情報」“當用漢字表”

<https://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/sisaku/joho/joho/kakuki/syusen/tosin02/index.html> (2022/2/11 閲覧)

文化庁「国語施策情報」“当用漢字字体表”

<https://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/sisaku/joho/joho/kakuki/syusen/tosin05/index.html> (2022/2/11 閲覧)

附録：漢字の字体・書体に関する施策年表

その他の漢字圏	日本
	1908 年 漢字要覧
	1919 年 漢字整理案
	1923 年 常用漢字
中 1931 年 北方話拉丁化新文字	1931 年 常用漢字(改訂)
中 1935 年「第一批簡體字表」	1938 年 漢字字體整理案
	1942 年 標準漢字表
	1946 年 當用漢字表
	1949 年 當用漢字字体表
韓 1951 年 教育漢字「常用一千字表」(57 年に 300 字追加)	1951 年 人名用漢字別表 (2017 年時点で 863 字)
中 1952 年 3 月「漢字簡化表」選定	
台 1953 年「文字制定程序法草案」	
中 1964 年「简化字总表」	
韓 1964 年「臨時制限漢字一覽」	
韓 1967 年「臨時制限漢字一覽」中 542 字に略字を制定・発表	
韓 1970 年 学校教育から漢字全廃	
韓 1970 年 韓國新聞協會「常用漢字表」	
韓 1972 年 「漢文教育用基礎漢字」	1981 年「常用漢字表」
中 1977 年 「第二次汉字简化方案(草案)」	2000 年「表外漢字字体表」
台 1982 年「常用國字標準字體表」	
港 1986 年「常用字字形表」	
中 1986 年「簡化字總表」改訂	
韓 1990 年 人名用漢字制限規定新設 (当初 5761 字。2021 年時点で 8319 字)	
韓 2000 年「漢文教育用基礎漢字」改訂	
中 2013 年「通用规范汉字表」	2010 年「新常用漢字表」